

陸前高田ボランティア派遣報告

つなぐ民

深野 毅

(立教大学学校・社会教育講座事務室課長)

2012年2月22日(水)15時、学生11名、永田先生とわたしは、甚大なる津波の被害を受けた陸前高田市立図書館にいた。

震災から11か月が過ぎた今でも、大方の瓦礫が撤去されていること以外は、ほぼ当時のままの状態であると思われる。鉄筋コンクリートの壁が一部打ち抜かれた建物外観、建物の中に入れば目にする剥き出た配線、山積みとなった図書や資料、そして供えられた花束……。

少し図書や資料を手に取りページを捲ってみる。

おそらく、多くの子供たちが、その大きな腫で穴の開くほど見たであろう絵本、ワクワクしながら記帳したであろう入館者名簿の幼い文字、そして、ここで働いていた方々が拠り所としたであろう目録・分類マニュアル。単にモノを破壊しただけでなく、人々が行きかい、思いを寄せていた図書館のその時を、その思いを、すべて打ち壊してしまった大津波であったのだろう。私たちは、「被害の大きさ」に目を奪われがちであるが、それ以上に人々の営みにおける、とても計り知れない「被害の重さ」があるのだと、気づかされる。

後に、参加した学生が言っている「この図書館は、どんな図書館だったのだろう」と。

その日の夜、私たちは一人の市民の方を宿舎にお招きし、震災についてお話を伺った。市庁舎で働くその方は、眼の前で同僚・市民が流されていく様子から「何が生死をわけてしまったか」を語られ、また、まだ小学生にも満たない幼いわが子を失いながら、お子さんと毎晩過ごした「読み聞かせ」を語ってくださった。司書課程の学生に対して気を使っていただき、「本」「図書館」の魅力を語ってくださったのである。そのような自らの辛ご経験に触れながら、誠実に学生に伝えようとしていた姿に、私たちは言葉なく、ただ感銘を受けたとしか言えない。

お話しを伺っている間、涙する学生もいたが、私自身も子を持つ親として、心が震える時であった。

学生たちは、この初日の出会いと学びを経て、2日目・3日目と作業にあたった。作業は、岩手県立図書館職員3名、陸前高田市役所職員3名との協働であった。

外は雪が降り積もり、作業でグループに分かれた体育館では、温度計が気温0℃を指している。約8,000冊という寄贈図書の段ボールが山積みされ、その一つ一つを解きながら、第一段階として、一般書・児童書・絵本に大きく分類していく。その後、目標の1,500冊をさらに抽出しつつ、0～9百番代に分類しつつ、リストを作成した。中からは、寄贈された方の手紙も見つけ出される。

この作業は、「図書の整理」と表されるであろうが、一つ一つを手にしながらの作業は、寄贈した方々の、少しでも「元気づけたい」「笑って欲しい」などの思いを陸前高田の市民に繋ぐ作業ともいえるだろう。重い本の移動、寒い中での作業、その中で学生たちは本当に誠実に、よく働いた。出発前は、「この子たち大丈夫かな?」と思わせるところも無いわけではなかったが、本当によく働いた。「重い」だの「寒い」だの、誰も口にしない。学生たちは、作業している間、何を考えていたのだろう。おそらく、前日に見た市立図書館、夜の市民の方のお話し、眼の前の図書を寄贈した人々の思い、それらに心を至らせながら作業していたのだろうと思う。

私にとっては、震災後3度目となるボランティアであるが、私はボランティア作業するその時間を、「祈り」の時であると思っている。

報道で目にするものと、実際に自分の目と、耳と、心で触れる現実とは、やはり格段の違いがある。四角に切り取られた映像のこちら側で見ているのと、360度見渡す限りの真ん中に立

たされた自分とは、やはり見えるもの、感じるものが違う。ここで実際に経験することは、それまでに「知っていたかもしれない」こととは、違う。

陸前高田から遠く離れたところで暮らす私たちには、この4日間は、いわば非日常であったかもしれない。それは当然のことであるし、日常と非日常を比較あるいは同化しようとしても、人それぞれが生きていく環境が同じでないことを思えば、そのようなことは、あまり意味を持たないこととされている。ただ非日常とはいえ、実際に自分の目で、耳で、心で触れてしまった私たち一人一人は、非日常から学んだことを自らの日常に、生き方に活かしていく責任を、それまで自分が持っていたもの以上に持つことになる。いや、「背負うことになる」と言うべきか……。

全ての活動が終わった後に、初日にお話しただいた方に御礼のメールを送った。

「お辛いご経験をお話しいただくことになり、大変ご無礼いたしました。」

すぐに返信が届いた。

「大丈夫です。学生さん達に話させていたただいたことは、私にとっても、とても良い経験で

した。」

とても辛い経験を人に話すことは、軽々に想像できるものではない。そうまでして話してくださったことに、ただただ感謝する。そして、「とても良い経験でした」と言ってくださったことに甘えることなく、この方のお話も、一人一人が自分なりに背負う、であろう。

立教学校(立教大学の前身)を創設されたC. M. ウィリアムズ主教の「道を伝えて己を伝えず」という言葉がある。私たち小さき民は、なかなか「伝える」などと言えるものでもない。誰かを感動させる、説得できる言葉もそれほど持っていない。ただ、自分なりに思うことがある。「伝える」ことはできなくても「つなぐ」ことはできるだろうと。

「道をつなげて、己をつなげず」と。

「立教」という伝統ある学び舎の中であって、その場に立てることの感謝と、次代の後輩たちが同じ場に立てるために、今「つなぐ」民となること。陸前高田の地において、多くの人々の思いの中で、少しでも「つなぐ」民になること。それならば、私も「つなぐ民」になれるかもしれない、と思っている。